
ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃にて 震守り編

【ZPDF】

Z0712Y

【作者名】

S

【あらすじ】

鷹野と戦い敗れた梨花。

この世界で羽入は運命と戦う覚悟を決める。

そして、ここに運命と戦う為の最後の駒が揃つ。

最後の世界で最後の戦いが始まる。

一話 始まり（前書き）

こんにちわ～
不定期更新で始まります。
駄文ですがよろしくお願ひします。
では、始まり～

一話 始まり

「……今まで良く頑張ったな」

とある家の玄関にて一人の少年が背中を向いている少年に尋ねた。
尋ねた少年の目はまるで戦争に行く家族を送るような表情だ。

「ああ、守らないといけない人が居るから……」

「もうか……頑張れよ」

「ああ……そろそろ行くよ、弘輝」

その表情は本当に神々しく彼を止めることを許される人間はこの世には存在しないと言わしめる物だった。

弘輝と呼ばれた少年はそれを分かつていてからいつ言った。

「頑張れよ……陸」

陸と呼ばれた少年はそう言われてその家から外へ一歩踏み出した。

一週間程時間が戻り難見沢

「つー羽入ー今日はいつ?」

梨花が起きてまず言つた言葉はそれだった。

前の世界で鷹野に殺された記憶はある。

これで自分の前にある運命と言つ壁を壊せる可能性は高くなつた。

「今日は五月の二十九日なのです！」

先程までどこにも居なかつた所に角の生えた少女が現れた。
彼女が羽入である。

梨花と共に百年間運命と戦つて来た相棒である。

「まだ三週間はあるのね……」

「はいーとこりで梨花。

僕は運命と戦つ為に実体化を行つのです」

それを聞いて梨花は驚いた。

実体化は羽入の中では禁術。

それを行うことは自分の神としての能力を捨て去ると言つことだ。

「あなたも運命と戦つ覚悟を決めたのね……」

それに羽入は静かに頷いた。

「分かつたわ。

どれくらいかかる?」

「分からぬのです。

でも、頑張るのですよ!」

「ええ、頑張りなさい」

その時一人は知らなかつた。

運命と戦う為の役者がもう一人ここに来ていると言つことを……
その駒こそ運命を打ち破る為の最高の駒だと言つことを……

一話 始まり（後書き）

さて、今回出て来た『陸』といつキャラですがひぐらしを裏の裏まで知っている

方なら知っている方が居るかもしません。
では、また次回です。

11／03日修正しました。

一話 一人の転校生（前書き）

こんにちわ～

これからは物語の日にちが変わる毎に日にちを書きます。
この方が物語の時間軸分かりやすいですからね。

では、始まり～

一話 一人の転校生

六月六日

圭 SIDE

「皆さん、 今日は転校生を紹介します」

『おおおおおつー』

知恵先生がそう言ったことにより教室内のテンションが一気に上がった。

転校生が来るのは前から決まっていたことだ。

「それと転校生は一人です」

前から決まっていた転校生は一人だが急にもう一人転校生が出たのだろう。

だが、それでも俺達が歓迎するのは変わら無いけどな。

「では、入ってきてください！」

知恵先生がそう言つと転校生が扉を開ける。

ああ！ そんな不用心に扉を開けたら！

ビュンッ！

風を斬る様な音がしてボールが開けられたボールに向かって飛んで行く。

教室内に居た全員は転校生に当たることを予想しただけだ……

パシ！

『……』

転校生はボールを取つたらしい。

「 下がつてろ」

良く聞き取れなかつたが転校生のもう一人の転校生の名前を呼んだ
んだろう。

どうやらお互に知り合いの様だ。

入つて来たのは少年。

俺と同い年の位だろう。

転校生（これからは少年と記す）は足元を見る足元にはロープがあ
つた。

その先に硯があつた。

「ふう……やつぱりお前を行かせてたらヤバかったよ。
入つてきて良いよ。足元には注意して」

少年がそう言つと少女が入つて來た。
めちゃくちゃ可愛い。

「あつう……緊張するのです……」

「ははっ、俺も少しは緊張してるよ」

少年はそう言つと生徒全員に向かつて自己紹介を始める。

「古代 陸です。

以後お見知りおきを」

そう言つて陸と名乗つた少年は頭を下げる。
すく 礼儀正しい少年だ。

自己紹介をした後陸は少女を前に出す。
少女に自己紹介しようと催促しているんだろう。

「あつう……古手 羽入なのです……
梨花の遠縁の親戚なのです……
よろしきゅ……よろ……よろ……よろしきゅ お願いしゅなのです……」

『おおおおおおおつー』

羽入と名乗つた少女は名乗つてから陸の後に隠れた。
知らない人よりも知り合いの方がやつぱり良いんだろう。

「皆さん、何か質問はありますか?」

「はいー。」

流石魅音、素早く手を上げる。

「二人は付き合つてるんですか?」

流石にからかつてやつてるんだろう。
だが羽入の方は顔を赤らめている。

ପ୍ରକାଶକ

その反応を見て陸の方は観念した様に言った。

「羽入は俺の婚約者です」

『はい?』

皆聞き置違ひだと思つて皆聞き返す。

何故か陸は羽入の耳を塞いで口へ言った

「だから羽入は俺の婚約者です」

「つまり一人共結婚の約束してるの?」

俺達が叫んでからしばらく一人は質問責めにあつていた。
気の弱い羽入に代わつて殆んど陸が答えているが。

「まあね」

因みに先程陸はさつきから羽入以外には警護で話してたから魅音が『もう敬語で話すのやめなよ』と言つてタメ口にさせた。

「いつ結婚の約束したの？」

「秘密だよ」

人差し指を口の前に立てて教えないと言つ様な表情をしている。

「ええ～～！良いじゃんケチ～～！」

余程教えて欲しかったのか文句をブツブツ言つている。

「皆さん！そろそろ授業を始めましょう！」

知恵先生がそう言つて授業が始まつた。

陸SIDE

授業の内容は授業と言つよりも白眉だった。
確か……圭一（だったか？）や知恵先生が生徒達に教えて回つてい
る。

俺と言えば……

「だからな、羽入。

ここは……」

羽入の専属教師をしている。

昔羽入はもつと聰明だと思っていたんだがな……
まあ、時間が流れれば人は変わるんだろう。
俺も昔と比べれば相当変わつた。

「陸、こっちも手伝ってくれ！」

奥さんの勉強ばっかじゃなくてさー。」

「分かった。

じゃあ、俺は梨花さんと魅音さんを見るから。
レナさんと紗都子さん頼めるか?」

「分かった!」

そう言って羽入に断りを入れてまず魅音の勉強を見る。
そこで俺は固まってしまった。

「これ……中一の勉強じゃないか……」

さつき確か案内の時に知恵先生が

『この学校の生徒の中であなたともう一人同じ年の生徒が居ます。
あなた達が一番田に最高学年ですからキッチンとしてくださいね』と
言った。

つまり、俺より上の学年は三年や高校生となる。
だが、この学校には高校生は居ない。
だから最高学年は中三になる。

魅音の身長からして彼女が最高学年だと推測出来るが……
何でその彼女が中学校一年生の勉強をしているんだ……

「ははは～～～！私は本番でかつ飛ばすタイプだからね～！
大丈夫だよ～～！それよりもうしたのかな～？こめかみを押された
りして～」

「いつ……！」

一度現実を見せた方が良いか……

「次の文中で主人公が思ったこと喜怒哀楽の内の一つを答えろ。

『その街を歩いていて少した時だ。

私の仲間が道端に落ちている人形に歩み寄った。

恐らく戦争で亡くなつた子供の物だろう。

仲間はその人形を抱いて涙を流して謝つた。

『私達の起こした戦争の所為で……ごめんなさい』

その言葉を聞いて私も涙を流した』」

簡単な問題だ。

小学五年生の時に塾で出された問題。

これが分からなかつたらこいつは……

「怒」

小学生五年生以下だ！

「圭一！こいつは受験を諦めた方が良い！」

「えー？何でさー？」

「当たり前だろ！」

何で何で怒つたんだ！自分も涙を流してるだろつが！

答えは哀だ！」

これで『愛？』とか聞き直したら俺は……

「愛？」

「圭一……俺は頭が痛くなつた……

俺は別の人を教える……

「

俺はそう言ひながら頭を押されて梨花の所に歩いて近づいた。

「よひしべ……」

「よひしべお願いしますなのです。じぱー」

警戒してるな。

そんなことは隠してるけど。

一応俺が味方だつて言ひじとを教えておくか。

「どいが分からぬかな？」

「いじるなのです」

「ああ、いじは……」

俺はそつ言つてノートに解法を書く振りをしていつ書いた。

『惨劇のことは羽入から聞いた。

俺は味方だ。惨劇を打ち破る為に協力する。

後で校舎裏で羽入を含めて話そつ』

それを見て梨花は少し驚いたような顔をしたが梨花はすぐに頷いた。

そして休み時間校舎裏

「それで？古城 陸。あなたは何者なの？

羽入の婚約者とか言つてるけどそんなことはありえないわ。

羽入は大昔から人には姿が見えない状態だったのだから

校舎裏に来て一番最初に梨花はそう言った。

「なあ、俺が大昔の人間だつて言つことは考へないのか？」

「あなたも羽入の様なものなの？」

「言つた通りのことだ」

俺の言葉に梨花は首を傾げた。

何を言つているのか分からなかつたのだろう。

今度は羽入がこう言つた。

「陸は僕の夫』古手『陸』の生まれ変わりなのです」

二話 大石刑事と陸の推理対決（前書き）

こんにちわ～

気が向いたので連続投稿です。

ちょっと大石さんの扱いが雑ですが気にしないで頂けると嬉しいです。

（大石ファンの方）ごめんなさい……

それと陸はゲームのキャラなのですが少しゲームのキャラから離れてますね……

相当黒いです。

では、始まりです。

二話 大石刑事と陸の推理対決

教室

羽入が俺の正体を言つた後梨花はしばらく呆然としていた。
そして一言『私を助けて』と言つた。

俺はその言葉に梨花に抱きついて答えた。

「絶対に救わないとな……」

俺は誰にも聞こえない様にそう呟いた。
俺は羽入を守るために力を付けた。

だけど、その力は羽入を守るためだけの力じゃない。
目の前で助けを求めている人を救う為の力だ。

「陸、授業終わったよ！」

「え？」

見ると名々が帰る為の準備を始めていた。
深く考え過ぎたか。

「俺帰るわ」

これ以上学校に居てもすることが無い。
そう思つて席を立つた。

すると……

「ちょっと待つた！」

そつと聞いて俺の前に魅音は立ち止った。

「何だ？」

「陸には部活に参加してもらいつよー。」

「部活？」

「何の部活だろ？」「少し気になる……」

「我が部はだな、複雑化する社会の中、活動毎に提案されるものがままな条件下、時には順境。あるいは逆境からいにかにして……」

恐らくそれは部活の域を超えていふと思ひ。

社会だのなんだのは一介の中学生がどうじつ出来る物ではない。

「つまり部活で遊んで楽しむ部活なのです」

さつきまでの演説の存在意義を説明してほしくなつた。

「さて、どうする？

因みに羽入は入るってさ」

「羽入も？」

「あうう……」

羽入は顔を赤くしながら頷いた。

どうやら本当らしい。

羽入が入るなら入らない理由は無い。

「分かつた入る」

「言つとくけどひつけの部活は勝つ為なら何でもやるよ。それにえげつない闇ゲームもあるしな」

「何でもか?」

「うさ。何でも」

魅音はそう言いながら一ヤケでいる。
勝てる気満々のようだ。

だが、何でもやるなら勝つのは俺だ。
俺を誘つたことを後悔させてやる。

「今日は、何をするんだ?」

「誰でも分かるジジ抜きだよ~」

「分かつた」

「あ、始めよ!」
……

「上がりだ

そう言つてカードを捨てる。
これで俺の三連勝。

皆は田を丸くしている。

「そんな……わたくし達が勝てないなんて……」

「陸ぐんす」い……」

「陸、一体何をしたんだ……」

「この程度チヨロイな……」

「さて、次は『古代君、前原君、お密さんが来てますよ。昇降口に行つてください』分かりました！
しうがないな……圭一、行くぞ」

「ああ、皆さんに進めてくれ」

「うん、分かった」

俺達は昇降口に向かつて歩き出した。

昇降口

「んつふつふつふ~」んにゅわ。

興富署の大石と申します

警察か……俺ちよつと嫌いなんだよなあ……

「何の用ですか？」

あらかじめ言つておきますが職務質問や任意同行ならびにひき出せ
拒否権がありますよ」

少しツンケンした言い方になってしまったが俺が言つていることは
事実だ。

実際今まで警察絡みのことは法律の穴を潜つて避けて来た。

「少しお話をされるだけですよ。
なあに、取つて食いやしません」

「ちっ、面倒な奴だ……」

「それより私の車に行きましょ。」

「ここは暑くて暑くて……」

あ、でも私の車は冷房効き過ぎてますので寒かつたら言つてくださいね」

「こここの車に行つたら逃げ場が無くなるな……」

「いえ、ここで話しましょ。」

「それとも……」

俺はゆづくと大石と名乗った刑事に近寄つて立つた。

「この学校の誰かに聞かれたら不味いことを話すんですか？」

「つー」

効いてるな。

恐らく心の中では『嫌な奴だ』とでも思つてんだろ？
主導権はこちら側にある。

このまま攻めさせてもいいぜ。

「あなたが話そつとしたのは雑見沢連續怪死事件のことでしょう？」

「お、おい一陸、何だよそれ！」

知らなかつたか。

まあ、俺も羽入から知らされたんだけどな。

「五年前この村にはダム建設計画があつてな。

村人は総出で反対したんだ。

それからしばらくなしてダム建設の所長が死んで、その主犯が一人消えた。

一年後には古手神社の……つまり梨花の父親が死んで、母親が消えた。

二年後にはダム賛成派の……紗都子の父親が死んで、母親が消えた。
三年後には紗都子を虐待していた紗都子の『何で知ってるんですか
！？』『はい？』

「え？」

「俺はね『三年後紗都子を虐待していた叔父が興宮に行つた』そう
言おつとしてたんですよ？」

地雷を踏んだな。
大石さん。

「つー」

「どうやら叔母が死んでいたようですね。

そして、北条悟史が行方不明になつたと。

圭一因みに全ての事件が綿流しつて言うこの地独特のお祭りの日なんだよ

で？あなたは何を話そうとしているんですか？」

『あくまで冷静に

主導権を握つたまま話を聞け。

じゃないと主導権を奪われる』

頭の中でそう言う命令が発令される。

その命令に逆らひつもりはない。

「私はその離見沢連續怪死事件の犯人を園崎家だと思つています。ですから『スパイをしろってことですか？』っ！」

「園崎家は犯人じゃないですよ

「……何を証拠に？」

「まず一年目ですね。

これは簡単です。

犯人が主犯以外捕まつたことです。

何で捕まつたんでしょうね？

園崎家が犯人なら匿うでしょうね？

取り調べで『園崎家が犯人だ』なんて言われたら困りますから。次に一年目のダム賛成派の事件ですがこれはおかしいんですよ。だって、展望台から落としたんですよ。

もしかしたら奇跡的に助かるかもしれないじゃないですか。

そんな回りくどいことは普通しません。

園崎家ならば普通に一人殺し一人を崖から落とすでしょう。
次に古手家の件の件ですがこれはこの村がオヤシロ様を狂信していることで解決できます。

この村では古手梨花をオヤシロ様の生まれ変わりとして崇めています。

その古手梨花は両親が居ません。

人間にとつてそれは相当の苦痛です。

例外もありますが彼女は今は少女です。

精神的につらいでしょう。

オヤシロ様の生まれ変わりである少女に苦痛を与える様なことをしますか？

四年目ですがこれもまたおかしいんですよ。

何で間に古手家が入つたんですか？

普通なら排除すべき北条家はさつさと排除するべきですがこの事件はそうではありませんでした。

さて、ここまで何か質問は？

長く喋つてから口が疲れた……

「あなたは一体何者ですか？」

「私は只の学生です。

行くぞ、圭一」

俺達は教室に向かつて歩き出した。

廊下

「なあ、本当に良かつたのか？」

教室に向かつ途中に圭一がそんなことを言い出した。

「園崎家が連續怪死事件を起こしてゐるって奴か？」

その問いに圭一は頷いた。

「なら、見ろよ」

丁度教室の扉の前に着いたので俺は扉を開いた。

そこには魅音達が楽しく笑つてゐる光景が広がっていた。

「魅音のあの笑顔を見てまだ彼女を疑つか？」

その問いに圭一は首を横に振つて見せた。

「なら良いじゃないか。

皆一帰つたぜ！」

「遅いよー早く早くー！」

「ほら圭一、行くぞ」

「応！」

俺は魅音達を絶対に疑わない。

そう……絶対にだ。

四話 部活での報酬

「うう……屈辱的ですわ……」

「俺が何でこんな恰好を……」

「はう……恥ずかしいよお……」

ふつ、敗者の遠吠えが気持ち良いなあ……

部活の結果だが結果的には俺が勝った。

それで全員巫女服だ。

デザインとしては俺がかつて羽入に着せられなかつた大きく開いた胸元に

股の下ギリギリの袴に背中の線まで見える開き。正に勝者に与えられる最高の眺め！

まあ、全部イカサマをして勝つただけどな。

「陸、一体何したの？……」

「ばらしても俺の勝ちは揺るがない？」

それで俺が罰ゲームだ。

とか言われるのは絶対に嫌だ。

着せるのは良いが着るのだけばごめんだ。

「……分かったよ。

説明して」

「分かった」

俺は頷いてカードを捨て山の中から一枚カードを適当に捨つ。
ダイヤのエースとクラブのエースだ。

俺はそれを見せる。

「覚えた？」

「うん」

俺はその返事を聞いてカードを裏返す。
位置はえていない。

「ダイヤのエースを引いて」

「え？ 簡単だよそんなの」

魅音はそう言いながらカードに向かって手を伸ばす。
そしてカードを抜いた。

そう……クラブのエースのカードを。

「えー？ 何でー？ おじさんはちゃんとダイヤのエースを……」

「ふつ、これが俺の技だよ」

そう言いながら俺は魅音からダイヤのエースを受け取り一枚のカードを表にして持つ。

「ネタばらしだ。

もう一度ダイヤのエースを抜いて」

「分かった

魅音は頷いて手を伸ばす。

そして今度はネタばらしだから分かりやすいようになります。

「あ！」

「気付いたか……」

俺がしたのは簡単なこと。

相手がカードを抜く前にカードの位置を逆にしただけ。

「そんな……でもさ、それって一枚以上だときつがない？」

「そこには慣れ。何回もやつてると上手くなるから」

そう言って俺は三枚カードを引いて見せる。

ダイヤの2、スペードのエース、クラブのジャックだ。

位置関係は右端からダイヤのエース、クラブのエース、スペードの

エース、ダイヤの2、クラブのジャックと言つ感じだ。

そして俺は指を上手く使ってダイヤのエースとクラブのエースの位置を上手くすり替えた。

「す、じ、い、す、じ、よ、陸君！」

「みい 多分陸は将来カジノ潰しつて呼ばれる様になるのです〜」

「もう幾つか潰したよ。」

「「「はー?」「」」

「せひ、圭一、ヒロー・リークにある（某カジノ店）って知ってるだろ？」

「三年前潰れた」

「ああ、会員なら子供も入れるんだよな。
確かたつた一人の子供に潰されたって……まさかー。」

「ああ、俺会員でさー

暇つぶしに入つたら潰しちゃつた」

「俺は悪くない。

あそここのティーラーが弱いのが悪いんだ。

「　　」

「　　」

空気がおかしくなった……

よしーここは羽入をからかうか。

「それより羽入！

やつぱり似合ひじゃないか！」

「ここで俺は言ひちやいけなことを言つたことに気付く。

真面目にヤバイ。

頭の中で警鐘が鳴る。

でも、もう遅いだろうな……

「やつぱり似合つ？

陸、あなたは私がこんなハレンチな服が似合つ様な服だと思つてい

たのですか？「

冷や汗が次から次へと流れで行く。俺は
ゆっくりと後に下がる。

でも、それは逆に羽入の炎に油を注ぐ危険なことだって忘れていた。

「陸、ビニに行こうとしているのですか？」

ヤバイ……

危険だ……

皆！助けてくれ！

そつ念を送つて皆を見る。

「　「　（ガクガクガクッ！）　」「　」「

皆震えてるね。
気持ちは分かる。

分かるけど……助けて？

「　「　（ふるふるふるひーー）　」「　」「

うそ……皆助けてくれないの？

仲間じゃないの？

そんなことを思つてている間にも羽入はゆっくりと近づいてくる。

「陸、何か言い残すことばは？」

くつ！

このままじゃ俺の命がやばい！
奥の手を使うしか……

くそ！

「羽入ー・愛してるー」

「え？」

「俺は羽入を愛してるー」

あ～言つてゐるこいつもさうづなく恥ずかしい……

「な、何を言つてゐるのですかもうボクもなのです……」

よしー何とかなった！

「！」、今回だけなのですよ？
今回だけ許してあげるのです……

そう言つて羽入は帰る準備を始める。
それに俺のバックも持ってきてくれた。

「か、帰るぞ！羽入」

「はいなのです……」

俺がまいた種だけじやつぱり恥ずかしい…………
家に帰る間もずっと田舎を合わせられなかつた……

五話 陸と羽入と読音との邂逅

皆、陸だぜ！

皆知つてるとと思つけど俺は羽入の夫の生まれ変わりなんだ。
だから俺には羽入の手料理を食べる権利があると思つんだ。
でもな、何故か今俺は羽入と一緒にエンジエルモートとか言つファ
ミレスで晩飯を食べてゐるんだ。

おかしくないか？俺達一緒に暮らしてゐるんだぜ？
晩飯は普通手料理だろ？何でファミレスなんだ？
鬱になりそうだ……

そしてその羽入はと言つと……

「あつ~…おいしいのです~！」

さつまから美味しそうにシュークリームを食べている。
こいつ、こいつ太るんじゃないか？
でも、こいつの幸せそうな顔を見ると注意する気力が無くなるん
だよなあ……

「あつ~」

ああ……ホント可愛い……

……はつ~危うくのまれるとこがだつた……

「羽入、そろそろここに来た理由を教えてくれないか？」

「あつ~」

「『あつ~』じゃない。」

甘い物が食べられるからとか言つ理由だつたら……」

「だ、だつたら?」

「今夜は覚悟してもらわなきゃならぬ」

「あつ!――違つのです!――

「なら何だ?」

「『惨劇』絡みなのです」

羽入はそう言いながら真面目な顔をする。
俺もその雰囲気に身構えた。

「魅音には実は双子の妹の詩音と言つ人が居ると言つのは説明した
と思つのです」

「ああ、それで?」

「……詳しく聞かせろ」

「その詩音と言つ子惨劇の種になりかねない子なのですよ

羽入は俺の言葉に頷き説明を始めた。

詩音は紗都子の兄である悟史に恋をした。

だが、彼は北条家人間。

それは許されぬ恋だつた。

そんなるある口悟史は警察に叔母の事件の件で話を聞かれることにな
る。

詩音は禁じられていても関わらず自らの身分を明かし悟史を守つた。

結果としては悟史は守られる』ことになるが詩音は爪を三枚剥がされることになった。

ここは全ての世界で共通のこと。

ここからは世界によつて違つが詩音が惨劇の主人公の世界だとある日の部活で圭一がレナにぬいぐるみを渡してしまつ。

その時魅音に『魅音にはこんな可愛い物は似合わないよな…』と言つたらしい。

その言葉は魅音の心に大きな傷を作つてしまつた。

そして魅音はそれを詩音に相談する。

詩音はそう言う相手が居ることに嫉妬する。

その結果どんどん悟史への感情が暴走し園崎家に犯人が居ると思いつめ復讐を始める。

そして魅音、圭一、紗都子、梨花、村長、祖母を殺し最終的には自殺する。

そういう世界があつたらしい。

「成程……でもよ、そつ言つ」ことなら俺は接触する必要が無いんじやないか？

その部活の時に圭一に人形を渡せつて言つて魅音にはあんまり浮かれるなつて言えば

詩音は惨劇の主人公にならないだろ」

「駄目なのです。前の世界ことなのですが……」

この前の世界では紗都子の意地悪な叔父が帰つて来て皆で協力して紗都子を救つたらしい。

その中には勿論詩音も含まれていたそうだ。

「成程な……奇跡は皆が信じないと起らなければいけないとか

「はい。惨劇も詩音が居ないと打ち破れないのです」

「で、ここに来て詩音に会うことにしてたと。
甘い物を食べたかつただけじゃないんだな」

「当たり前のです！」

羽入はそう言つて胸を張つた。

すると……

ガツシャアアアアツン！

そんな音が鳴つたので気になつて見てみると少女がオタク三人に囲まれていた。

「せつしゃのジーンズがベタベタなりー早く拭くより！」

その言葉で状況が理解できた。

どうやらあのウェイトレスにあのオタク共がわざと足を引っ掛けウエイトレスを転ばせデザートを股間にかけさせたと言つ訳か。
成程……充分外道だ。

「あー陸ーあの子詩音なのですー！」

「何？」

確かに見てみると魅音に良く似ている。

「羽入、手荒な真似をするけど怒らないでくれよ?」

「安心するのです。
大丈夫なのですよ」

俺はその言葉を聞いてゆっくりとオタク共に向けて歩き出した。
そして俺はオタクに声をかけた。

「おー、下郎」

「は? 何ものにやり!
お前なんかに用はないにやり!..」

「まあ、俺の話聞けよ」

俺はそう言つてオタクの肩に右手の手の平を置く。

「しつこい奴にやり!

何度もお前に用はいだだだつ!..?」

「同士!..? お前!..? 同士に何をした!..?」

「ただ、握力を込めて握つてるだけだけビ?..?」

ただ俺の握力はボーリングの玉を握りつぶすくらいの力はあるけど
な。

「同士のから離れろ!..?」

オタク……ああ！もうBで良い！

オタクBはそう言って殴りかかって来る。

俺は左手の手の平で拳を受け止める。

勿論左手にも力を込める。

「いだだだだだっ！」

するとオタクCが動こうとしたのでそれを止める。

「動くな！動けばこのオタク二人の握っている場所を握り潰す！」

「つ！」

オタクCはその言葉を聞いて動かずに止まった。

俺は三人の忠告する。

「お前等、もうこの店に顔を見せるなよ？
もし、俺がこの店に来てお前達の顔を見たら……」

俺はAとBを離していつ言った。

「コンドコソコロシテヤルカラナ？」

いつも喋り方は疲れるけど結構効果的だ。

「「「し、失礼しましたああああああっ！」」「」

三人共一気に逃げて行つた。

ま、あの程度の奴等を追い払えない訳無いけどな。

「あの……」

「ん?」

声のした方を見ると詩音が呆然と俺を見ていた。
俺は知らない様な感じを装つてこう言った。

「大丈夫か?みお……魅音じゃないな」

「え!?」

やはり驚いているんだろう。

俺も見た限りでは髪しか違いが分からぬ。

「俺は古代 陸だ。

あそこで座つてるのが俺の婚約者の古手羽入。
古手神社の古手梨花の遠縁の親戚だ」

「えっと、私は園崎詩音です」

ああ、違いが分かつた。

声が若干こっちの方が高い。

本当に若干だけど。

「よひしぐ。

少し話さないか?」

「え?」

「北条悟史」

「！？」

その言葉に詩音は反応した。
やつぱり詩音は語史が好きだったんだな。

「北条語史のことを話さないか？」

「……あなた何者ですか？」

「オヤシロ様が惨劇を食い止める為に使わした遣いだ」

「その反応は『ここつ何言つてるんだ？』見たいな田だつたけど当然だな。

「とりあえず話そつ。

あんたに取つても有益な話しがあるかもしれないぞ」

「はい。

分かりました。

話しを聞かせてちゃんとした話を聞かせてくださいよ」

「ああ」

俺と羽入はそれからじづりくの時間をエンジンモードで過いした。
詩音と話をする為に……

六話 陸と羽入と詩音との話

羽入から聞いた話だと詩音はこの時期園崎家が悟史を消したと思つてゐるらしい。

更に紗都子の所為で悟史は限界まで傷付けられたと思つてゐるらしい。

その二つの誤解を解かなければ惨劇は訪れてしまう。

ならば俺がその二つの誤解を解いて惨劇を訪れなによければ良い。

と言つたと俺達は詩音のバイトが終わるのを待つてゐる。
今は20・50詩音のバイトが終わるのが21・00。
後十分待つていれば良い。

「しつかし……羽入はそんなに甘い物が好きだつたか？」

確かに昔は甘い物を見ると嬉しそうな顔をしていたがここまでじゅ
無かつた筈だ。

一体昔からの千年の間に羽入に何があつたんだろう？

少し気になる……

「甘い物が好きになつたのは陸の所為なのですよ？」

「俺の？」

なら羽入が太つたら俺の所為か？
何とかしないと……

「陸の作る甘い物がおいし過ぎてその魅力に逆らえなくなつたので
す」

「それでも太るから少しは自重しろよ」

そう言いながら羽入の口に付いているクリームを取つてやる。羽入は少し顔を赤くしたが気にしない。

「あうう……／＼／＼／＼／＼

ああ……可愛い……

何て言うか……保護欲が……

「何をしているんですか？」

「おひとすまん」

気が付かなかつた……

俺としたことが……次から気をつけなければな。

「座つてくれ」

俺は俺の向かい側の席を指す。

羽入はそれを見て俺の隣に移動した。

そして俺は語り出した。

「まず、何で俺が北条悟史を知っているかだ。

信じなくても良いが俺は本当にオヤシロ様から真実を聞いた

詩音は『こいつは何を言つているんだ』と言つ様な顔をしているが構わずに俺は続ける。

「まずは確認事項だ。

まず一つ。

お前は北条悟史は園崎家が消したと思つてゐる

その質問に詩音は黙つて頷いた。
どうやら他の世界と同じらしい。

「一つ、お前は北条悟史は北条紗都子が傷つけたと思つてゐる」

その解答は肯定の顎をだつた。

ふむ……ならばそれでも良いだろ？

一つの誤解を消してやる。

まずは園崎家の方だ。

これは大石に説明したことを説明すれば良いだろ？
大石に説明したことを話した。

「……なら悟史君はどうして行つたの？」

これは知りたいだろ？

当たり前だ。

自分の好きな奴が行方不明になつたら行方を知りたくなる。

「答えてやる。

必ず会わせてやる」

「陸ー？」

羽入は驚いた顔をしている。

恐らく『東京』の件だろ？

「大丈夫だ。
何とかする」

俺の真剣な顔に羽入は結局折ってくれた。

「……分かったのです」

渋々だが羽入は頷いてくれた。

俺は羽入の返事を聞いて詩音に向き直った。

「紗都子の件を聞いてくれるな?」

「……はい」

その返事を聞いて俺は語り始めた。

「詩音、お前は紗都子が悟史を傷つけたと黙っているがそんな無い。それにもしそうだったとしても紗都子はその罪に気付いている筈だ」

「そんなことあつません!」

その声に周りの客は詩音に視線を向ける。

俺は詩音に座る様に手で催促する。

「あの子は罪に気付かずのうのうと生きてるんです。
なのに何で気付いていると思うんですか?」

声に若干怒氣が混じっているがあまり怖くない。

「なら紗都子に会いに行くか?」

「え？」

本当なら一人が解決するべきだ。
ならば、一人を引き合わせるべきだ。

「彼女と会つて話をしろ。

そうすればお互い思つてることを話せりだら？」

「……そうですね、なら明日の放課後に分校に行きます」

「分かった。

それと悟史の件だが明後日だ。

良いな？」

「はい、分かりました」

そうして俺達は解散して各自自分の家に帰つて行つた。

陸の家

今は夜中の1：00。

羽入は二階の俺の部屋で寝ている。

俺は一階の電話でとある場所にかけている。

「弘輝か？」

『どうした？ 陸』

「入江機関、知つてゐるだろ？」

『ああ、ちょっと待つてろ』

弘輝がそう言うと保留音が鳴る。

それから一分弱でその音が止んで弘輝の声が聞こえた。

『良いか?メモ取れよ』

「ああ」

そう言われて俺はメモの用意をする。

『行くぞ、入江機関は離見沢症候群を研究、ならびに治療の方法を見つける為の機関だ。』

少し前までは軍事利用も考えられてたけど小泉ってお偉いさんが死んだ所為で軍事利用はされなくなっちまつたらしい。

元々離見沢症候群自体が危険な病つてことで研究を反対されてたけど小泉は反対派の声を抑えてたらしい』

「つまりあれか?小泉は入江機関のパトロンだったのか?」

『ああ、実は入江機関の中に鷹野つて奴が居てそいつと個人的交流があつたらしい』

「そうか、分かった」

メモを取るのが大変だった……

「それと入江機関に圧力をかけて欲しいんだが……」

『おう、良いぞ。

どんな風にかければ良いんだ?』

「『一瞬で潰されたく無かつたら村人のとある一人の住人を北条悟史に会わせろ。

無論俺も同行させる』

『北条悟史つて確か治療薬の検体だろ?』

「ああ、色々あってな。

明後日だ」

『了解。

圧力かけとく。

お休み』

「ああ

俺はそう言つて受話器を置いた。
本当に持つべきなのは良い友だ。

「さてと……寝るかな

もう眠くなってきた……

俺は一階に上がつて羽入の顔を見ながら眠つた。

第三者視点

「どうすれば……」

入江は悩んでいた。

その原因は先程東京からかかつてきた一本の電話だった。

『今すぐあなたの機関を潰されたくないならある一人の住人を北条悟史に会わせる。

その地に居る一人の男も同行する。日時は明後日だ』

まさか、東京がこんな電話を寄こすとは彼は思っていなかった。
この研究は完全に秘密裏で行われている。

それを東京が敗れと言つたのだ。

しかも命令からして断ればこの診療所は潰される。

もしそうなつたら……

「悟史君……紗都子ちゃん……」

雛見沢症候群で苦しんでいる一人が最悪の死に方をしてしまう。
それだけは避けなくてはならない。

「受けよつ……」

それが彼女達の為になる……

入江はそう考え目の前に居る悟史の病室のガラスに手を付けた。

話 協音と紗都トトとの邂逅

六月七日

今は授業が終わり放課後。

詩音が来るまで皆を待たせている。

「ねえ、陸。

一体何で皆を待たせてるの？」

これで魅音からのこの質問は十回目。

「何度も言わせんって……

待つてれば分かるって言つてるだろ？」

いつ言つても魅音は飽きずには質問していく。

実は俺はさつきから汗を搔いている。

詩音が何をしだすか分からぬ。

「はあ……」

それにもしても遅い……

もう十分は待ってる。

何かあったのか？

そんなことを思つてこると……

「来たか……」

「えー？」

「みいちゃん！？」

「魅音！？」

「魅音さん！？」

詩音が来た。

詩音は一人男を連れていた。

その男を見て俺は荒事に慣れている様な男。
顔にサングラスをかけている為目は見えないが恐らくそのサングラスを外せば
鋭い目が見えるだろう。

「詩音！？何でここに！？」

魅音はいつも詩音に近づいていた。
それを俺は言葉で遮った。

「俺が呼んだんだ」

「どうして？」

「その人はオヤシロ様の遣いらしきですよ」

〔冗談で言つたのに真顔で言われたら否定できないじゃないか。
実際はオヤシロ様の夫だし……

「良く来たな、詩音。

でも、後の人は誰だ？」

俺がそう聞くと大男は頭を下げてお辞儀をする。

「葛西辰由と申します。
詩音さんの付き人です」

葛西辰由？どこかで聞いた様な……まさか！

「散弾銃の辰ーー？」

散弾銃の扱いにおいてはまさに右に出る者はいないと謳われた伝説の男！？

園崎組に所属しているとは聞いていたが……実際に会えるとは……

「もう現役は引退しています。
お忘れください」

「は、はー。
古代 陸と申します」

俺はそう言つて礼をする。
危うく呑まれるとこだつたぜ……

「で、陸さん。

この子が紗都子さんですか？」

詩音は紗都子の近くに居た。

俺はさりげなくを装つて紗都子の後に移動する。
それと同時に葛西さんも詩音の後に移動していく。
やはりこの男は本物だ！
殺気が痛い……！

「ああ、やうだよ。

紗都子、じゅりやは魅音の双子の妹さんの園崎詩音さんだ」

「は、始めましてですわ

そつ言つて紗都子は戸惑いながらもお辞儀をする。

俺はと言つと詩音が武器を持っているかどうか探つていた。

詩音はナイフを持つて葛西は拳銃を一丁持つている様だ。

俺は丸腰なんだけどな……

ま、しようがないか……

「回りくどいのは嫌いなんで单刀直入に聞きますね」

詩音がそつ言つと周りの空気は本当に重い物になった。

そして、その空気の中詩音はこつ言つた。

「悟史君が消えたのはあなたの所為だつて分かつてます?」

詩音がそつ言つた瞬間圭一達が何か言おうとしたが俺は田でそれを制した。

この場は詩音と紗都子が解決するべきだ。

だが、詩音が紗都子に何かをしようとした時は……勿論容赦しない。そんなことを思つてみると紗都子は一度少しだけ目を瞑つて微笑つた。

答えた。

「はい、分かつていますわ

「え?」

詩音は俺の言つていたことを信じていなかつたんだろう。

驚いた顔をしている。

「私はにいーにいーの後でずっと隠れていきました。
それがにいーにいーのことを傷つけていた……
それは気付いていました。

だから……あなたがもし、私のことを恨んで殺したいと言つんなら
……

何の抵抗もいたしません」

その顔は覚悟を決めた表情だった。

紗都子は俺の方を向き田で俺に指示をした。

『私を守らないで』

本当にやつしたのか分からない。
だけど……俺の頭の中でやつした紗都子の声が聞こえた。
そんな気がした。
でも……

「詩音、紗都子を殺したら俺はお前を殺すぞ」

「陸さん!…?」

「紗都子、思い出してみる。

お前の兄貴は優しかったんじゃないのか?」

俺は羽入から悟史の優しさを聞いて知ったんだ。

悟史が本当に紗都子のことを大切に思っていたことも……
そんな悟史が大切にしていた紗都子を傷つける奴は絶対に許さない!

「詩音、悟史は消える前にお前に『紗都子の』ことを頼む』って言つたんじゃないのか？」

お前は頼まれてたのに紗都子を傷つけるのか…？
傷つけると言つんなら俺を殺してからにしろ…」

「へ、うわあああつ！」

詩音は叫びながら隠していたナイフを取りそのままのナイフを俺に向かって斬りかかった。

だがそのナイフは俺に届かなかつた。

「やめましょ、詩音さん」

止めたのは詩音の付き人、葛西辰由。

葛西は手の平でナイフの刃を握っていた。
その手からは血がドンドン流れ出ている。

「か……ひ……い？」

「この少年は守ると決めたら絶対に守ります。
彼が守る時で戦う時は私ですら勝てません」

「…………あなたもす」意志の持ち主ですね。
出来ればあなたとは戦いたくありません」

「ふつ……詩音さんは私が説得しましょ。
失礼します」

葛西は血が流れていな方の手で詩音を引き摺つて出て行つた。

「す、じい奴だ……」

俺はそう呟きながら葛西の出て行った出口を見ていた。

八話 仲良し？姉妹

六月八日

どうしてこうなったんだろうな？

俺は確かにこうなることを望んだぜ？

でもさ、物事には行き過ぎつてことあると思つんだ……
え？何のことか分からない？

なら、見てくれ。

俺が頭を抱える理由が一瞬で分かるだ。

「嫌ですわ——！」

「紗都子ーちゃんと南瓜を食べないと困りますよー。」

「いつ言つことだ……」

今は昼飯時。

何故かいきなり詩音が来て紗都子の前に重箱（いん 紗都子の嫌いな野菜）を紗都子の前に置き

『悟史君からあなたことを頼まれています。
なのでまずは好き嫌いから』

とか言つて無理矢理野菜を食べさせている。
見ていて少し可哀想だがまあ、良いだろ？
詩音は紗都子の為を思つてるので誰も詩音を止めない。
若干何名か（部活メンバー殆んど）は面白そうに紗都子を見ている
が放つておく。

「 読書、一昨日の約束忘れてないよな? 」

「 はー、当たり前ですか 」

悟史の」とせ口止めしている。

もし、言えば紗都子も会いたいと聞こ出すだろ。

それは流石に不味いからな。

「 わーと、やるやう弁当の時間も終わりだ。
部活だー野郎共ー 」

「 うーうーうーうーうー 」

案外アドリブでもつこてきてくれるんだな。

校庭

「 今日は鬼! 」 ひーだよー。 」

「 艶じー絶対勝つやるぜー。 」

「 僕が鬼だったら圭一は絶対負けるナビな 」

「 何をー。 」

「 良い雰囲気じゃん? 」

「 ほりじやんさんするよー。 」

「 「 「 最初はグー！じゃんけんポン！」 「

各自出した手はこうなった。

俺グー

羽入グー

魅音グー

紗都子チョキ

梨花グー

レナグー

特別参加の詩音グー

「見事に紗都子が負けたな」

一瞬で紗都子が負けるとは……

「不祥」の北条紗都子が鬼を務めさせていただきますわ……

ホントに悔しそうに言う紗都子。

少し可哀想だがしようがない。

「やつぱり鬼が追いかけるのは百数えてからにする？」

「いや、それだと偶にズルをする奴が居るから俺の問題を解いてか

らだ。

『ある事故現場で一人の少年が血を流し倒れていた。
現場には次の三つが落ちていた。

アルバム

手帳

カメラ

少年は事故で死んだか？それとも殺されたか？』

答えは梨花に教え梨花は紗都子が答えてから百秒間は捕まらない。
無論百秒間の間梨花を追いかけることは禁止だ』

俺は梨花に答えを教えて離れた。

そして

「始め！」

その魅音の合図と共に各自散らばって行く。
そんな時圭一が俺の近くに寄つて来た。

「お前つて案外酷いのな……」

「何がだ？」

「問題文の最初で『事故現場』って言つてだろ？
殺されたなら殺人現場だ」

「流石」 そう言つこつた。

大抵は現場に落ちている物から解こつとするけどそんな思考じゃ解
けない問題だ』

そんなやり取りをしていると

「陸さん！騙しましたわね！」

そんな声が聞こえる。

恐らく問題を解いたんだろう。

必死に俺を追いかけてくる。

「騙された恨みを……

まあ、良いか……

圭一、ん？おー…どーに行く…

「わひばー」

くそー圭一を囮にする作戦が行えない！

ならば！

「えー何をする気ですのーーうちに向かってくるなんて！」

そう、俺は紗都子に向かつて走り出したんだ。

人には奇襲をかけられてから何秒間か対応出来ない時間がある。

それは米軍兵士で平均十五秒。

その時間は如何に訓練しても零にならない！

更に紗都子は兵士ではない。

部活メンバーでも彼女はトラップを得意とする。

体育会系では無く頭脳で攻める方！

そこから計算して五秒だ。

今から五秒以内に……

「ちゅつー止まりなせこませー」

一秒……

「た、タツチしますわよー！」

一秒……

「ちょーそろそろ不味いですわー！」

三秒……

「ひ、ひいっ！」

四秒……

「ぶつかりますわ！」

五秒！

俺は脚に全力を込めて一気に跳んだ。
そして着地地点は紗都子の後。

いくら紗都子であっても今の一瞬で通り過ぎた場所にはトラップが仕掛けられない！

「じゃあなー紗都子！」

俺はそう言しながら紗都子から離れて行つた。

「きいいいいつー絶対に捕まえますわー！」

そんな宣戦布告を受けながら。

「ふう…… やで、 面白いしてるかな？」

俺は校舎の屋上に隠れていた。
見ると皆俺を探している。

「皆捕まつたか……」

俺は腕時計を見る。

「後十分……」

ある意味命がけだ。

負けたら相当恥ずかしい格好をして下校しなければならない。
それだけは避けたい。

「ふむ…… 後七分」

考えごとをしている間に二分経った。

ここも長くは持たない。

そう思つて降りると……

「あー陸君！」

「レナー！」

しまつた……！見つかった！

レナに紗都子と同じことをするのは危険だ。
下手をすれば俺の脚がレナの顔に直撃する。

そう思つて、俺はレナとは逆の方向に逃げる……が。

「見つけた！」

「圭一まで！」

挟まれた……！
こうなつては……
全力を出すしかない！
俺は屋上に登る。

「レナ！ 挟み撃ちだ！」

「うんー！」

レナと圭一も屋上に上がつて來た。
どうやら俺は屋上で時間を稼ごうと思つていてると推測したらしい。
それはそうだろ？
いくら低いとは言え屋上から飛び降りれば怪我をする。
だが、それは常人の話だ。
俺は常人じやない！

「うおおおおおおおっー！」

「なー！ マジかよー！ レナ逃がすなー！」

「う、うんー！」

俺は校庭に向かつて跳んだ。
だが、万事休すとはこの事。

跳んだ先には魅音達が居た。

「陸、終わりだよ」

「私達の勝ちですわ」

「みい 僕の勝ちなのです」

「梨花ちゃん、さりげなく活躍を自分だけの物にしてしまってますね」

「もう言ひとなら僕の負けでもあるのですよ」

「ふつ、そう言ひとか……」

「魅音、お前、圭一が一週間行方不明になつてそれからいきなり『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする?」

「信じないね。この目で見た物が真実とは限らないから」

「そうだな……それが正しい解答だー!」

俺はそつと羽入の方に走る。

「何をしてますのー?自分からー!」

「羽入は良い嫁だつてことを証明するのやー!」

「「「はあ?」」

その場に居た全員が意味が分からず首を傾げたが俺には分かった！つまりこいつ言うことだ！

「だらあつー！」

俺は羽入を拾い上げた。

そして梨花も回収。

「二人共！落とされない様にしてるよー！」

「はいなのですー！」

「ちよー・どう書いづら」とですのー。」

「分かりたいなら俺を捕まえろー！」

皆、分かつたか？

ヒントは俺が屋上から飛び下りてから皆が発した台詞にあるぜ。

解答は次回だ！

九話 勝つた理由

「 「 「 負けたあ～～～！」 」 」

そう言って倒れ込む五人。

結果的に俺は勝った。

まあ、身体能力が違うからな。

そんなことを思つていると紗都子が悔しそうな顔をしながら俺に尋ねて來た。

「羽入さんと梨花は鬼では無かつたんですね？」

その五人共その問いの答えが知りたいのだろう。

皆俺の方を見ている。

俺は羽入の頭を撫でながら答えた。

「魅音、俺の質問覚えてるか？」

俺がそう聞くと魅音は『何だっけ？』と首を傾げた。

こいつは遊びのことしか頭に無いらしい。

二十分前のこと忘れているのは相当重症だ。

「俺は『圭一が一週間行方不明になつてそれからいきいなり『これは圭一の遺骨だ』とか言われて骨を置かれたらどうする？』と聞いたんだ

「ああ、そうだったね」

「すっかり忘れてたよ～」と言しながら魅音は頭を搔いた。

本当にここには駄目かもしね。

「羽入と梨花は鬼のふりをしてたんだよ」

「　　はああああつ！？」

五人の叫び声が鳴り響いた。

まあ、そうなることは最初から予想はしていた。

まさか二人が鬼のふりをしていたなんて思わなかつたんだろう。俺は驚いている表情を浮かべて、いる旨を見ながら説明を始めた。

「俺が屋上から飛び降りた後の羽入と梨花のセリフを思い出してみろ」

「確かに梨花ちゃんが『みい 僕の勝ちなのです』だよな？」

「羽入さんは『そいつ』となら僕の勝ちでもあるのですよ』でしたがそれが……あ！」

紗都子は気付いたか。

流石トラップの名人と言つたところだな。

羽入と梨花の仕掛けたトラップを見抜いたか。

「何だよ？ 一体何なんだ？」

圭一と魅音と詩音とレナは気付いていないらしい。

俺は少しヒントをあげた方が良いかなと思つてこいつ言つた。

「あの状況はお前達鬼の勝ちだった。

だからあの状況では『私達の勝ちだ』 そいつべきだ。

なのに羽入と梨花は『私の勝ちだ』と言つたんだ

分かりにくかつたかな？
でも、分かるだろ。

「あ！ 分かつたぜ！」

「レナも分かつた！」

そう言つて二人は嬉しそうにハイタッチをする。
これで分かつていなのは魅音と詩音だけ。
時間の関係でもう待てない。

「締め切りだあ～」

「「分からなかつた～～～！」」

二人はそう言いながら悔しそうな顔をして地面を叩く。
こいつ等そんなに悔しかつたのか？

「正解は！『羽入と梨花が鬼のふりをしていた』でした～」

「「ああ～そう言つことか～」」

二人は納得した様な表情をした。
まあ、納得してくれないと自分のヒントを出す才能を疑うといふだ
つたぜ。

まあ、そんなことより……

「皆、罰ゲームの準備は良いか？」

「 「 「 ギクッ...」 」

「 ひつやから逃げられたと想つてていたらじー。」
「 こつ等やつぱりバカだ。

「 あー、罰ゲームを楽しもつかあー？」

「 あやあああああつー助けてええええつー...」 」

その後罰ゲームとして『メイド服着用で校長先生の頭を撫でる』と
言ひ罰ゲームをした時は仲良く包帯をして帰った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0712y/>

ひぐらしのなく頃に～皆守り編～

2011年11月17日19時16分発行